

授与機関名 順天堂大学

学位記番号 甲第 2137 号

Impact of inadequate initial antimicrobial therapy on mortality in patients with bacteraemic cholangitis: a retrospective cohort study

血流感染症合併の胆管炎の予後に対する不適切な初期治療の影響に関する後方視点的観察研究

田頭 保彰 (たがしら やすあき)

博士 (医学)

論文内容の要旨

急性胆管炎は、重症敗血症または敗血症性ショックをもたらす菌血症の主要な原因の感染症である。適切な初期抗菌薬が菌血症を合併した胆管炎の短期死亡率に与える影響については十分に研究がされていなかった。我々は、血液培養を採取した日から 30 日後の全死因死亡率に関連する要因について多変量ロジスティック回帰分析を使用して解析を行った。573 人の菌血症を合併した胆管炎患者 (年齢中央値 77 歳、男性 58.3%) が本研究の対象となった。30 日後の全死因死亡率は 6.6% (38/573) であった。133 人 (23.2%) の患者で不適切な初期抗菌薬が投与されていた。30 日後の全死因死亡率に起因する独立した因子は、Charlson 併存疾患指数スコア > 3 (調整オッズ比 (aOR) 4.12; 95%CI 1.18-14.38)、診断時の黄疸の存在 (総ビリルビン > 2.5 mg / dL) (aOR 3.39; 95%CI 1.46-7.89)、血液培養陽性から 48 時間以内の敗血症性ショック (aOR 3.34; 95%CI 1.42-7.89)、肝胆道系の悪性腫瘍による胆道閉塞 (aOR 8.00; 95%CI 2.92 -21.97)、および不適切な初期抗菌薬 (aOR 2.78; 95%CI 1.27-6.11) であった。不適切な初期抗菌薬選択は、重要な修正可能な予後規定因子であった。